

# ホトトギス

八月号

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日発刊  
昭和三十三年八月一日発行（第百二十四巻第八号）



## 風雅の小筥（四十二）

廣太郎

ホトトギスの読者であればどなたでも「春灯」という季題は御存知であろう。秋にもほぼ同じ意味で「秋灯」があるが、ある年代を境にこの季題の読み方が違うのである。「春灯」を例にすると、『第三版ホトトギス新歳時記』には見出し季題として「春灯（しゅんとう）」とあり傍題として「春の灯（はるのひ）」、「春燈（しゅんとう）」となっている。ここで虚子編の歳時記をお持ちの方は御覧頂きたいのだが、そこには先ず見出し季題として「春燈（しゅんとう）」とあり、傍題は「春の燈（はるのひ）」、「春灯（しゅんちやう）」となっている。

私がホトトギス社に入社した頃から暫くは句会に行くのと、この季題は披講する時特に注意され「春燈」と書かれていけば「しゅんとう」、「春灯」と書かれていけば「しゅんちやう」と絶対に読まなければならぬ、と厳しく指摘されていたのである。ところがある時ホトトギス社に一通の投書があり、季題として、しゅんちやう」と読ませるのは間違いだ。という事が書かれてあった。確かに辞書によると「灯」を「ちやう」と読ませた時の意味は「激しく燃え盛る火」という意味になり、季題に当てはめてみるとやはり少し意味合いが違ってくるという事で『改訂版ホトトギス新歳時記』から読み方が統一された、という経緯がある。虚子編の歳時記にこのように掲載された経緯を私は知らないが、実はこの指摘された人というのは、所謂アンチ虚子を自称されていた方なのである。縁というのはこんなところから生れるのである。

# 旬日記 汀子

令和二年八月二日 下萌句会

八月十三日 清交社

水引の花さりげなくさりげなく 新涼の日々の待たるる心かな  
ふたたびは見られぬほどの星月夜 健康を確かめ合ひて集ふ夏  
送りたる弔句に仰ぐ星月夜 友二人送りし盆の月仰ぐ  
新涼にまだぬの心生れけり  
夜風吹くやがて遅れて桐一葉 庭師来て金魚の池となりけり  
暑くとも予防のマスク離されず 大阪倶楽部 出句

欠席の誰彼ありて生身魂 美しき暑中見舞といふ絵皿 薔<sup>rose</sup>の<sup>rose</sup>花の香纏ひ旅終へし  
坦々と生きゆく日々とある晩夏 ふと夜空仰ぎ稲妻走りけり 懐しき友帰り来よ魂祭  
八月十日 悼 松山ひとし様

旅の友又句友とも悼む秋 桐一葉音なき音の中にあり もう旅も思ひ出ばかり薔<sup>rose</sup>の<sup>rose</sup>花に  
どの旅も語り尽せぬ涼しさに 会場はいつもと違ふことも夏 八月三十一日 朝日カルチャー

これよりの旅の淋しさ思ふ夏 八月十九日 夏潮句会 世の中に従ひつつも露けしや  
新涼とまだ言へぬとは思へども 近きしとも偲ぶ露けき夜も更けて

八月十一日 綿業倶楽部出句 池掃除して生きてぬし金魚かな 秋暑し暑しと今日も出掛け来し  
行けざりし三瓶は遠し星月夜

# 廣太郎句帳 廣太郎

令和二年八月二日 野分会音屋例会

朝顔の蕾の裳にある未来  
千年を見す糸神杉宮相撲  
神の愛とは朝顔の赤にこそ  
横綱は並べて小柄や草相撲

八月二日 青風会音屋例会

西瓜食ぶ君の唇染め上げて  
カンナの緋庭に生氣を戻しつつ  
恋多き君の饒舌カンナ燃ゆ  
西瓜提げ庭より入り来る漢  
八月四日 カトリック新聞選者吟  
梅雨明に心の扉開放す

八月五日 NHK文化センター

蟬鳴いて都心に人の戻りつつ  
街騒といふ梅雨明の狂詩曲  
地下街を出て片陰に紛れ込む  
日盛に音失ひし都心かな  
炎天に高層ビルの傾ける

八月六日 蕉心会

蟬の声忌日の空を軋ませて  
石の上の亀その上の亀涼し

病葉に風は力み抜いてをり  
溜息のやうな鴉の暑し  
地球あと半回転で秋立ちぬ  
別撮りの新郎新婦園涼し  
揚羽蝶風に剥されゆく纏れ

八月十日 朝日カルチャー若草句会

カンナ燃ゆ水平線を引き寄せて  
天守無き城の盛衰かちがらす  
星飛んで一人又逝く利那かな  
流星に十字を切りし漢かな  
カンナの緋バージンロード染め上げて  
流星やジュラ紀の記憶もて消ゆる

八月十三日 土筆会不在投句

蠅や三瓶の哀史包み込み  
火祭や老柳荘を開け放ち  
夕星に蠅いよよ昂れる  
八月十四日 北國文芸選者吟  
流星や億光年を引き摺りて

八月二十日 登高会

電波塔赤く灯りて星今宵  
光年を隔てて近き二つ星  
文月や旋律五線埋めゆく  
文月や文字の余白と語り合ひ  
ぼうぶらの日を弾きたる昼下り

八月二十一日 廣邦会

その中に漁火加へ星月夜  
蝸に稜線模糊と暮れ初むる  
八月二十二日 青風会東京例会選のみ選者吟

雨戸開くより朝顔の出会かな  
ほろほろと稲の花咲く利那かな  
鵲の橋を渡つたきりの君  
かなかなに一番星の呼応して  
星月夜神話を語る翁かな  
八月二十五日 若水句会

蝸や山氣靈気と変る時  
蝸に落日の色薄れゆく  
故郷の空気もるとも西瓜食む  
一匹のかなかなに山従へり  
零れつつこぼれつつ星月夜かな  
塩といふ西瓜を甘くする魔法

八月二十六日 目黒学園句会

底紅の底四次元の風起る  
遠花火君に見られし涙跡  
鳥語止むより蝸の呟ける  
蝸に三瓶の朝の動き初め  
三尺の花火に宇宙近付けて

八月三十日 野分会東京例会

草相撲誰にも負けぬ少女かな  
宮相撲軍配に神降臨す  
朝顔の紫がちに凋みゆく

# 雑詠 廣太郎 選

炭焼いて余生楽しみゐると文 徳島 岩田公次  
 ペルシャより来て恋猫の敵役 同  
 冬瓜に乗せて軍手を乾してある 同  
 花仰ぎ花の水脈曳き城見舟 奈良 古賀しぐれ  
 終章の舞城濠へ飛花落花 同  
 風となり水となりけり花の果 同  
 夏期講習ポニーテールを指で梳く 東京 今井肖子  
 冷房の効いて少女の肘細き 同  
 夏服にけふ一日のしわ深く 同  
 健啖を医師にほめられ春の宵 長岡 安原 葉  
 野猿来てをりし温泉宿の窓うらら 同  
 木々芽吹く客もふえきし峡温泉街 同  
 両の掌に米寿の数の福の豆 相模原 木村享史  
 疫病打つべしと擱んで年の豆 同  
 枯木影伸ばして地球回るなり 同  
 強靱にしなる万羽の鳥雲に 東京 田丸千種  
 鳥雲に入る湾岸をひと舐めし 同  
 鳥雲に入る淡交に飽きたらず 同

兆しとはかくも小さく犬ふぐり 袋井 湖東紀子  
 雨戸繰る明るさに聞く初音かな 同  
 年毎に何か失ふ雛かな 同  
 紙風船子の息に足す母の息 東京 藤井啓子  
 若芝や楳円のボールイレギュラー 同  
 新参や店のいとはん同い年 同  
 虫出に大地震忘れてはならぬ 熊本 岩岡中正  
 まだすこしくぐもつてゐる初音かな 同  
 初音いまほめられてゐる雛かな 同  
 はるかなるものと呼ばれて鳥帰る 西宮 海輪久子  
 その先もその先も空鳥帰る 同  
 揚雲雀落雲雀空こそばゆき 同  
 普段からポーカーフェイス万愚節 香川 湯川 雅  
 春愁や消ゆるごとくに慣れてゆく 同  
 省略の終の表情紙雛 同  
 三月十日の飛行機雲曲がる 神戸 山田佳乃  
 両国も墨堤も三月十日 同  
 平らかな風を起こせり鶴帰る 同  
 クレープは破れ三月十日なり 東京 阪西敦子  
 祖父若く来し町三月十日かな 同  
 昼飯の行きと帰りの残花かな 同  
 踏み入りし分だけ初音遠ざかる 加須 岡安紀元  
 せせらぎの音を辿れば初音かな 同  
 脳内を空つぽにして野に遊ぶ 同

## 雑詠句評（七月号より）

春寒し悼む暗さのタワーの灯 長岡 安原 葉

「春寒」が悼み心をいよいよよつらせる哀切の句で、日ごろは希望と楽しさのシンボルの「タワーの灯」が今夜はこの暗さである。まず「春寒し」と静かに語りだして、「悼む暗さの」と思いをつのらせつつ、寒くて暗い「タワーの灯」で終る。この「暗さの」「タワーの」と「の」でつないでゆくしらべにも作者の心の落胆のプロセスが見える。心の陰翳を静かに写生した繊細な一句である。（中正）

東京タワーやスカイツリー、又大阪の通天閣も日本のタワーでは様々な色でその時々々の感情的な表現をしているが、令和二年から続く新型コロナウイルス蔓延による警告としての赤い色の表現もその一つである。喜びの時の明るい色とは裏腹な暗い様子が季節を通して伝わってくる。（廣太郎）

嗤はれるほど虚子が好き老の春 相模原 木村享史

「老の春」は季題「新年」の傍題で、年をどって迎える新年を祝う心持である。この句は、あざわらわれるほど虚子が大好きな老人の新年を祝う心と目出度さが詠まれた句で、ひたすら虚子を称え、虚子が説いた花鳥諷詠を実践しながら迎えた新年を喜び、さらには、虚子がよく詠んだ「老の春」に共感できる悦びの心情も、読む側によく伝わってくる句である。如何にも作者らしい句と言えよう。（葉）

作者からは時々実際虚子から実際手解きを受けられた時の事を聞かせて頂くのだが、鮮明に覚えておられて我々も結構勉強になるが、やはり実際に虚子に習っておられた方の虚子に対する思いには圧倒される。季題を通して作者の誇りと揺るぎない花鳥諷詠への愛が感じられる。（廣太郎）

天地有情

心子選

長月のパズルこんがらがつてをり  
 長月の電話短く恙告げ  
 賜りし米寿の春を畏みて  
 かがやいて米寿の翁と初富士と  
 梅園に近づきし径知らず風  
 塀越えて来る梅園の香る風  
 このごろの家居たのしき春の雷  
 突堤に人を惜めば春の雷  
 見えてゐて灯台遠し青き踏む  
 戻ればほのと色あり初桜  
 今はただ花の思ひ出あるばかり  
 愛娘ゐて家桜ありし頃  
 卒業の無き句の道を学ぶ館  
 卒業歌思ひ出つのる涙かな  
 早々と咲きいつまでも野梅かな  
 あたたかや電話の声のまだ耳に  
 鶯に遠鶯の応へけり  
 夕桜吾が草庵は古びても

東京 稲畑廣太郎  
 同  
 相模原 木村享史  
 同  
 長岡 安原 葉  
 同  
 熊本 岩岡中正  
 同  
 神戸 三村純也  
 同  
 東京 今井千鶴子  
 同  
 宇治 西村やすし  
 同  
 龍ヶ崎 今橋眞理子  
 同  
 鎌倉 星野 椿  
 同

紅ほのとさして黄桜散らんとす  
 水仙とたはむれ風は海原へ  
 堇野の仄かな香り追ひて来し  
 花堇吾を見つめてをるやうな  
 納める日近き雛の灯を惜しむ  
 さきがけて薄墨ざくら日和かな  
 み吉野の花はいかにと月仰ぐ  
 吉野へと思ひはせたる朧月  
 ひとしきり吉野に銀の花の雨  
 花散りぬ風の導くままにかな  
 あかとききの雨音春へ忙しなき  
 朝寝して夜べの稿より改めし  
 アネモネや南欧の濃き彩を壺に  
 うらかな日差しを浴びて乳母車  
 初花の増えゆく刻を共に居て  
 届き来し夕べの祈り鐘朧  
 虚子を知る一人となりし虚子忌かな  
 これよりの花見ること無かるべし

神戸 山西商平  
 同  
 東京 河野昭彦  
 同  
 西宮 本郷桂子  
 同  
 東京 山田閨子  
 同  
 神戸 和田華凜  
 同  
 千葉 大木さつき  
 同  
 東京 高濱朋子  
 同  
 宝塚 水田むつみ  
 同  
 津 中杉隆世  
 同